

はた だ ひで お
畠 田 英 夫

学位の種類 博士(経済学)
学位記番号 経博第25号
学位授与年月日 平成8年11月7日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻 東北大学大学院経済学研究科(博士課程後期3年の課程)
経済学専攻
学位論文題目 セー経済学の方法とその適用
論文審査委員 (主査)
教授 馬渡尚憲 助教授 小田中直樹

論文内容要旨

J. -B. セー(1767-1832)は、フランスの政治・経済・思想の一大変革期に生きた経済学者である。セーが受けた歴史の変化の経済理論への影響という観点から考察する。

I. 経済学の領域と方法

J. -B. セー(1767-1832)は『経済学概論』(1803年)の序論を経済学方法論の分析にあてた。これは経済学方法論の歴史においては最初期の論考である。その後、本書は生前に第5版まで版を重ね、方法論の議論もますます拡充した。また、晩年の『実践経済学全講義』においても方法論の議論は繰り返しあらわれている。

セーは当時のフランスにおける科学運動を背景として経済理論を実践に寄与しうるかたちで展開するために、彼の経済理論の論考の冒頭に方法論的考察を置いた。本稿ではセーの方法論の内容を、経済学で採用されるべき方法(1. 発見の論理-帰納と演繹-)・科学における経済学の地位(2. 経済学の領域と構成)・そしてこれらの方法論上の議論の関係を説明する経済学と実践との関係(3. 経済理論と実践)の三つに分け、その内容を検討した。

その内容を要約すると以下のとおりである。

対象世界と理論との関係をセーは素朴な实在論で捉えている。そして、実験と事実の観察を基礎とした帰納的な方法を「実験的研究方法」と呼んで、これが経済学で採用されるべき方法であると

する。セーの議論はリカードウ派・重農学派を批判するがあまり演繹的な側面の分析が弱い。この実験的研究方法の内容は「帰納→前件→後件→検証」の手続きを示すものである。経済学はこの方法が採用されたのは、アダム・スミスの著作が最初であるとセーは評価している。そしてこの実験的研究方法の採用こそが、経済学が真理に近づく唯一の手段であると論ずるのである。そして理論史の見方としては絶対的歴史観を持っている。

経済学が実践に役立つように、すなわち各経済主体の合理的な行動のための指針となるべき知識として経済学を構想し、その観点から経済学の領域を確定しようとする。当時のフランスでのめざましい自然科学上の成果を目の当たりにして、セーは理論を実践に役立ちうるものにしようとした。そのためには、前件・後件がともに現実性を持たなければならない。現実とかけ離れた理論では実際的な生活に役立てることが出来ないからである。また経済学は過不足なく体系だった知識を提供しなければならない。それによって人々は自分の目的に応じた諸知識を統合し実際の生活に役立てることが出来るからである。このようにして、セーは実験的研究方法を採用して帰納の側面を重視し、そして経済学の領域を明確にしようとしたのである。

セーはスミスの『国富論』と重農主義者を決定的にわかち相違を『国富論』で用いられた方法に見出した。他方では『国富論』を実践に役立ちうる知識として整備・体系化するための検討を行った。以上のような目的と先行学説に対する批判からセーの経済学方法論は形作られたのである。

II. セー市場価格論の形成

セーの価値論は当時の経済学に少なからぬインパクトを与え、当時の経済学の発展の中でも一定の地位を占めていた。しかしながら、今日の評価は必ずしも高いとはいえず、またセーの価値論の性格付けも生産費説・効用価値説・需給均衡論の三つの解釈が併存している。本論では、『概論』各版の価値論の変遷・発展を追跡し、セーの価値論は超短期と長期の分析を区別して需給均衡論の分析を行っていたことを示してセー価値論の評価が統一されなかった理由を明らかにした。

各節の内容は以下のとおりとなる。

I. 『概論』初版の価値論

現行価格論と自然価格論の区別が重要であることが説かれているにもかかわらず、現行価格の決定と自然価格の決定は異なる論理が用いられており、その間の関係は明白には説かれていない。

しかし現行価格の決定論と現行価格の自然価格への調整の議論を整理してみると、前者の議論では非常に短い市場期間を想定しており、後者の議論では比較的長い市場期間を想定していることが分かる。セーは市場期間の相違によって市場価格の決定に果たす需要・供給の役割が異なることを明示的に論じているわけではないが、現行価格・自然価格のそれぞれの対象を市場期間の相違によって区別して議論している。このことからセーの価格決定論は需要供給の枠組みで一貫した分析を行っていることが評価することができる。

II. 『概論』第2～5版の価値論の推移

各版の変更の特徴をまとめてみると、初版で提起された需要供給の枠組みの精緻化の試みという

ことができる。

初版では自明と見做していた効用と価値との関係が第2版では効用が財に対する需要を生み出すものとして考察される。第3版では生産資源・財の希少性の議論を行い、生産的サービスをも含むすべての財・サービスの価格が需要供給関係によって決定されることが明らかにされた。第4版では個人の財に対する評価から説き起こして需要供給関係を説明しようとする。生前最終版である第5版では予算制約と消費者行動から需要表を導きだそうとする一連のパラグラフが付け加えられる。また、この版から生産要素市場と財市場が相互に影響を及ぼし合う関係が説かれる。これら各版での価値論の特徴を概観してみると、一貫して需要供給論を主張しながら、特に需要の分析を掘り下げて行ったことが分かる。

Ⅲ. 価値論の基本構造

『概論』初版から第5版の変遷を踏まえて、セーの市場価格論を中心に基本的な構造をまとめる以下ようになる。第一に、効用の生産という考え方はセーの経済学の大きな特徴ではあるが、市場価格決定論で果たす役割は需要表に集約され、効用価値説を裏付けるものではない。第二に、財と所得の循環フローのなかで生産・分配が統一的に把握されるメカニズムをもっている。そして第三に繰返しになるが、セーは実質的に短期・長期の区別をしながら一貫した需給均衡論を適用している。

Ⅲ. 企業者

セーの社会構成は生産の行程の分析を含んだ生産要素の分類にしたがって、分類されている。

すべての生産物、すべての富は勤労がその道具を用いて生産される。そこで生産の主体的要因である勤労 *industrie* と客体的要因である勤労の道具とに生産の源泉を大きく分け、そこからさまざまな生産ファンドを分類している。

生産ファンドはすべての財・サービスの源泉であり、各生産者が受け取る所得の源泉でもある。なぜなら所得は各生産ファンドを所有している生産者が、自分の所有している生産ファンドが生み出した生産的サービスと交換に所得を受け取ると考えているからである。

所得の源泉として見たとき生産ファンドは勤労の能力・自然的生産要素・資本の三つに大きく分かれる。この生産ファンドが生み出す生産的サービスの対価として受け取る所得の種類によってセーは社会構成を考えた。それによれば勤労者・地主・資本家の三者に分かれるが、彼はすすんで、生産の行程を勤労者を〔研究－応用－実行〕の三つの作業を分類し、それぞれを三つの階層に分類した。それが学識者・企業者・労働者の三つを区別するのである。この三つの階層のうち学識者は技術革新に貢献するが、その所得は応用の作業に対する所得、したがって企業者としての所得と考えられるのであり、経済的な意味のある階層は企業者・労働者・地主・資本家となる。

セーの社会構成観は生産ファンドの分類にしたがって企業者・労働者・地主・学識者の4つの階層からなっている。重農学派・イギリス古典派の三階級構成に企業者を加えたのがセーの社会構成観である。セーの社会構成は次のような意義がある。社会を構成する各階層は機能的に捉えられて

いること。企業者の概念を導入することで利潤と利子を区別したこと。そして経済システムの中心に企業者を置いたことである。

結語

セーはフランス啓蒙主義と科学運動の影響を受けて、その方法論を経済学の分野に適用しようとした。そのため経済学の方法論としては最初期の論稿を『経済学概論』[1803]の冒頭に著したのである。彼は経済学を実証的な学問にしようとしたし、現実に応用可能な知識の体系とすることを目論んだ。

実証的な経済学を目指した一つの成果として彼の市場価格論への分析の集中が挙げられる。重農主義者のケネーの「良価」は市場で決定されるものではなく、市場にもたらされる前に決定されたものであった。それとは反対にセーは市場で決定される価格以外に価格は存在しないという立場を徐々に鮮明にする。彼の価値論は、アダム・スミスの影響を受けながら市場価格の分析に集中し、そして自然価格論の批判という観点から短期と長期の分析を実質的に分けて論じながら、需要・供給説として一貫した議論をしていた。

経済学方法論のもう一つの目的であった経済学を応用可能な知識の体系とするという目的を「応用」の主体という観点から見ると、セーはその役割を産業企業者 *entrepreneur d'industrie* に担わせている。リチャード・カンティロンが企業者の概念を初めて経済学に持ち込んだのだが、セーはこの企業者を経済の全システムの中心に置いた。カンティロン・テュルゴの社会構成を見みると、セー以前は土地を所有しているかいないかが基本的な社会構成の指標であった。政治・経済上の勢力を反映していたのであろう。セーは革命後の勢力地図を反映して、積極的・能動的に経済に関与し、生産・分配の要の位置を占める経済主体を生み出した。それがセーの企業者である。企業者の考え方自体はカンティロンが経済学に導入してから半世紀が経つが、セーにいたって全経済システムの中心の地位を占めるに至ったのであり、従来のフランスの社会構成観を覆すものであった。

論文審査結果の要旨

本論文は、セーの経済学を方法論、市場価格論、企業者論について検討し、方法論と実際の経済理論との照応を示して、その学説史上の意義を定めようとしたものである。

セーは方法論で経済学の実証科学という性格を強調したが、彼の市場価格論はイギリス古典派の労働価値説を否定し実際に市場価格に影響している要因を重視していて、実証科学の性格を示している。また、方法論で応用科学という性格を強調したが、彼の企業者論は自由主義的立場の故に応用主体を政府ではなく企業者に求めたことに対応するものであって、応用科学の性格を示している、という論旨になっている。

方法論と市場価格論に比べ、企業者論の分析は幾分物足りないし、当時の社会変革がセー経済理論にどう反映したかという問題提起の割には、理論内在的であり、理論と当時の社会実態との相関の分析は十分とは言い切れない。しかし、理論内在的分析の範囲では、とくに方法論と価格論では、独自の視点でかなり密度の高い研究成果を得ている。

セー方法論の議論では、仮説的・公理的演繹法や数学の援用に対する否定的見解の分析、「実験的方法」の解明、「体系の精神」と「分析の精神」の対比、事物連関の知識としての理論の実践への意義の解明、「社会的富」による経済学領域論の析出等の作業を行っている。

市場価格論の議論では、効用価値説、生産費説という解釈のいずれも採らず、両者を需給均衡説の両面と解している。価格論の『概論』版間異同の詳細な分析、「自然価格」論後退の解明、需要量と価格の相関の「ピラミッド」の紹介、「超短期」の均衡価格と生産費の関係による供給量の説明、要素価格と製品価格の関係の「一般均衡」論の説明等が行われている。

企業者論では、「資本家」と区別された「企業者」の機能と企業者利得の説を扱っていて、「企業者」とは機能の分類であり、地主から自立しこれに敵対する「勤労の企業者」であり、組織者・運営者としての活動において理解されていたという説明を行っている。

わが国のセー研究は、岡田純一氏以来こしばらく静止状態にあったが、当論文は、方法論をベースに置いたことから、セー経済学の全体をとらえやすくなっていて、経済主体の行動とこれのもたらす均衡価格に関するセー説について、斬新な知見がもたらされている。よって、当論文は、博士の学位を授与するにふさわしい水準にあると判断する。